

ふるさとの自然や文化を愛し
地域や社会に働きかける子供の育成

1 はじめに

朝日校区は、呉羽丘陵の里山と立山連峰を臨む平野とに囲まれた自然豊かな地域である。富山市の小規模特認校として、朝日校区だけでなく他校区からも特認校制度を利用して通学する児童が全体の3割程度在籍する。地域と学校とのつながりは強く縦割り班活動や全校での委員会活動等において異学年で交流することや、地域での農業体験をとおしての異世代交流を全校で日常的に行っている。今年度は、多様なふるさと学習を全校児童で体験する形態から、全校児童を低・中・高学年の二学年ずつに分け、体験活動を教科や「総合的な学習」の時間などの教育課程の中に位置付け、少人数での主体的な学びの推進を目指した。

名産のスイカ栽培や稲作等の農業体験、スキー教室のインストラクターへの協力など、地域の子供を地域の皆でわいわいと育てる雰囲気は長年引き継がれている。そのような地域の人々とのつながりや、小規模校での異学年での交流、多様な体験活動を魅力として感じ、本校を選択し通学する特認校区保護者の期待は大きい。

平成29年度からの特認校制度の導入や朝日校区への移住促進を図る朝日地区活性化協議会の計画によって、少しずつ児童数が増加し、平成29年度には40人だったその数は令和5年度には80名となり倍増している。そのような中でも、地域の方々は変わりなく協力をしてくださっていたが、これまでと同様に全ての農業体験を全校児童で行うといった形態のままであると、児童数の増加により、順番待ちをする時間が長くなる、興味ある児童が活動の中心になり主体性のない参加となることも危惧され、学びから遠のくのではないかと課題が浮かび上がってきた。

そこで、学校運営協議会、小規模特認校支援協議会との相談を重ね、地域と学校とのよりよい連携のあり方を探り、令和5年度からは、体験活動や行事の見直しをかけた取り組むこととした。

まず、低学年では、生活科でサツマイモや野菜の栽培を体験しながら、地域の方々とのふれあいを大切にして学習することとした。そして、中学年では「総合的な学習」の時間で名産のスイカを栽培し、栽培の方法やその生産に携わる人々の思いに迫る学習をすることとした。さらに、高学年では、社会科や「総合的な学習」の時間を中心に、地域の歴史や受け継がれてきたものやこと、稲作などについて「朝日かるた」や「あさひむかしばなし」などの資料を用いて学習することとした。

小規模校をさらに小さな集団にして体験活動をすることによって、地域の方に気軽に質問をし、課題を解決する道筋を見付け、次の学習につなげるなどして、主体的な学びになるようにしたり、「今度はもっと話を聞きたいな」と、気軽に交流したりできることを目指した。このようにして、子供たちにとって、よりよい異年齢交流、地域に軸足を置いた深い学び、主体的に自分たちの未来を考えるための礎づくりを大切にしながら取り組んだ。

2 活動の実際

(1) 1・2年生（生活科）の取組

1・2年生は「わいわい農園」で、地域の方の協力を得てサツマイモの苗植えを行った。サツマイモを育て、全校のみんなに美味しく食べてもらおうという思いで苗植えやつる返しなどの世話を続けた。生活科の発見カードには、「はっぱのいろかたちがふしぎ。もうそろそろほってもいいんじゃないかな。」「でっかいサツマイモがあったよ。ほるのがたのしみ。」などと、サツマイモの様子を確かめながら掘り頃を考えたり、収穫を楽しみにしたりしながら世話をすることができた。

2年生は、夏野菜について調べ、自分で育てたい夏野菜を決め、地域の農園で苗を購入した。その苗の植え方や、強く育てることや病気の予防について質問し、その後の栽培活動に見通しをもって取り組むことができた。



【サツマイモ掘りをする1年生】



【1年生の発見カード】



【農園で質問する2年生】

(2) 3・4年生（総合的な学習の時間）の取組

朝日地区の特産であるスイカの栽培を通して、甘く上手に育てるコツを、地域の方に質問して世話を続けた。4年生は、地域の方を「スイカ名人さん」と呼び、畑でお会いする度にその時々に応じた世話を尋ね、水やりの時期や着果棒の立て方等を教えていただいた。つるや葉を整えたり、積算温度から収穫の時期を考えたりするその細かな作業の一つ一つが甘さの秘密であることが分かり、作業を丁寧に行う農家の方々の思いを知ることができた。

栽培の季節が終わってからは、学んだことを学習発表会で伝え、スイカ名人さんへのお礼を伝える集会を開催し、交流を続けながら学習のまとめをしていくことができた。その中で、4年生は、「農家さんはおじいちゃんたちばかりだな」「自分たちにできることはないかな」「直売所が新しくなるらしいから、看板を作ったら飾ってもらえるかな」などと話し合い農家の方に尋ねることにした。スイカ名人さんからは、「ありがとう、待ってますよ」と、言っていただけことを励みに、目下、制作中である。

自分たちの体験と学びから、未来の朝日地区に意識が向き始め、身近なところから働きかけた姿である。



【栽培の方法を尋ねる3年生】



【スイカを収穫する4年生】



【集会で感謝を伝える4年生】

(3) 5・6年生（社会科、「総合的な学習」の時間）の取組

5・6年生は、田植えと稲刈りの体験を社会科の稲作の単元と関連させて、学習した。田植えの際はころがしを用いた手植えと田植機の体験を、稲刈りの際は手で刈り取り、まとめて結ぶ作業とコンバインでの作業を体験した。米作りの機械化について実感を伴って学ぶことができた。

さらに5年生は、朝日地区での生産量やドローンを使用した農業の機械化、農業に携わる人々の思いをゲストティーチャーから学ぶ機会を設け、これからの朝日地区の農業や日本の農業について考えることができた。



【転がしを使った田植え体験】



【刈った稲の結び方を学ぶ】



【朝日地区の稲作について聞く】

6年生は、「あさひむかしばなし」や「朝日かるた」から、地域の史跡や歴史等について学んだ。特に安田城をめぐる歴史や史跡の価値等について、富山大学教育学部の授業と連携して教育学部学生との学習プログラムを組み、教室や安田城跡で授業を行うことができた。現地での学習や資料にはない当時の様子を学生から聞くことによって、当時に思いをはせ、この史跡を残していきたいという思いに至った。

他にも、朝日滝が盛んに流れ人々が訪れていた頃の様子や友坂遺跡の史跡価値等について、地域のゲストティーチャーと学ぶ機会を設けた。地区の歴史を知り、その価値や意味を考えたり、未来につなぎたいという思いをもったりすることができた。



【大学生と安田城跡で学ぶ】



【安田城跡の史跡価値について考える】



【朝日滝の変容の原因について知る】

(4) 全校での活動

二つの学年で学習し栽培したものを全校児童で味わう機会を設けた。1・2年生が作ったサツマイモは焼き芋にして全校児童でいただいた。給食時のオンライン放送では、「ぼくたちの作ったサツマイモがおいしい焼き芋になってうれしかったです」「1・2年生さん、おいしかったです、ありがとう」などと、感想を伝え合った。

また、3・4年生が作ったスイカは、夏休みに全校登校日やプール解放日にいただいた。「今日のスイカは、サマーオレンジっていうんだよ」「甘いね、もっと食べたい」などと、スイカを囲んで会話しながらいただき、楽しい雰囲気にもまれた。

そして、5・6年生が田植え、稲刈りをしたもち米は、12月に地域の方々のご協力を得て、もちつき会でもちとおこわにさせていただいた。2月には、また、地域の方と一緒にポン菓子づくりをしていただく予定である。

サツマイモ、スイカ、もち米を地域の方々と一緒に作り、全校と地域の皆さんでいただくということをとおして、自然とのつながりを意識したり人々の温かさを感じたり、「来年もまたおいしいスイカを作りたいな」「来年は田植えをするのが楽しみだな」と、待ち遠しさを感じる感想もたくさん聞くことができた。自分たちの経験を下学年に伝え、これからの経験に期待する子供たちの姿があった。



【低学年の焼き芋を皆でいただく様子】 【中学年のスイカを皆でいただく様子】 【高学年のもち米で行うもちつき】

3 まとめ

多様な体験をすることで、栽培自体のおもしろさ、振る舞う喜び、地域のよさや人々の温かさ、歴史の重みなど、一人一人がそれぞれの面から感じるものがあった。その一方で、自然と向き合い栽培する難しさ、農家の高齢化などの問題にも気付くことがあった。これは、一回の体験で終わらせない、教科や「総合的な学習」の時間としての位置づけがあったからこそ、楽しさや考えたいことに向き合うことができた成果であるといえる。

子供たちが学びの機会を生かし、自分の考えを確かにもちながら自ら課題を設定し解決できるように、学校は、さらに地域各団体との連携を図り、地域人材をさらに活用しながら交流や学習を積み重ねられるような場を設定する。そして、授業者は、子供たちが主体的にそして深く学ぶことができるような単元の展開や年間の計画をさらに検討していく必要がある。

そして、子供たちが自ら考えた課題を追究し、ふるさと朝日のよさに気づき、ふるさと朝日への愛着をもちながら、心豊かに学んでいくことに期待して、自分の生き方を考えるとともに、未来に思いをはせていくことができるような支援や指導を今後も続けていきたいと考える。

